

今月の PICK UP



『海と灯台学』 海と灯台プロジェクト／著 文藝春秋 557.5 ㊦

全国およそ3000基ある灯台は、国防と貿易を安全確実にする役割の為に建築されました。現在では、GPSの発達により灯台の実用的な役割は低くなり、文化的価値や観光資源としての役割を担う物に変わりつつあります。本書には「日本の灯台の父」と呼ばれたイギリス人技術者リチャード・ヘンリー・ブラントンの功績、今に続く皇室と灯台の関係、維持管理を行う灯台守の方々のインタビューなどが掲載されています。

全国には「のぼれる灯台」として16基残っています。この夏、近代日本のロマンを求め訪ねてみるのはいかがでしょうか。

『民藝と手仕事』 暮らしの図鑑編集部／編 翔泳社 750.2 ㊦



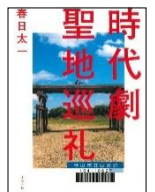
民衆の日常生活から作り出された日用工芸品に美を見出すことができる品、民藝品。それらは地域の風土や歴史を背景とし、人々の生活に豊かさをもたらしてきました。そんな民藝品を衣・食・玩具などの分野ごとに、写真や図を交えて紹介しています。この本をとおして、身の回りにある民藝品の素晴らしさを見つめ直してみませんか。

司書の おすすめ



『時代劇聖地巡礼』 春日 太一／著 ミシマ社 778.2 ㊦

映画やテレビ番組の時代劇のロケ地には、京都や滋賀が多く使われているそうです。この本では映画史・時代劇研究家である著者が、作品名や俳優名とともに各ロケ地を紹介しています。ドラマの場面紹介と写真を見れば、テレビで見た時の記憶がよみがえってきそうです。全部で12のコースに分けて案内されていますので、お出かけの参考にもなります。



『学芸員の観察日記』 滝登 くらげ／著 文学通信 069.3 ㊦



意外と知らない博物館や学芸員のあれこれ。普段のお仕事から知られざる裏側まで、学芸員あるあるや博物館の内実を4コマまんがで紹介した1冊です。たくさんの仲間が働く「山奥博物館」を舞台に描かれる日常は、ゆったりとしたタッチでほのぼのと楽しめます。雨が多いこの季節、本書を読んでから博物館を訪れてみてはいかがでしょうか。きっと今までにない楽しさが見えてくるはずです。

『おちくぼ姫』 田辺 聖子／著 角川書店 913.6 ㊦

日本版シンデレラともいえるこの物語の原典は、今から1000年ほど昔、平安時代に成立したとされる『落窪物語』です。田辺聖子さんの筆で「物語のいちばんおもしろいところ」を抜き出し、味付けがなされた本作は、2023年の本屋大賞発掘部門を受賞しました。不幸な境遇にある姫君と貴公子の恋の行方に胸躍らせる一方で、主人であり物語の主役でもある貴族たちを押し除ける勢いで活躍する召使いたちからも目が離せません。

